

VSOP「ネイティブ英文法」初級編 3日間集中:特別プログラム全20ユニット

		表現内容	英語は、一定の語順でいろいろな言葉を使っている
1日目午前	ガイダンス	VSOPお薦め英語勉強法	英語の習得は、抑揚を伴った発音練習が重要で、適切な発音を身に付ける方法をお伝する。その他、学習に役立つ、いろいろな参考書・学習システム・英語資料、方法を紹介。
	エッセンス講座	英語の主語述語と語順	先に「主語(S)に対する話し手の気持ち・判断(V)」を、「S-V」と言い、「その内容(対象)」を後ろで「O-P」と言うようになっている。口語、文語に限らず「S-V-O-Pという一定の語順」。
1日目午後	UNIT-1	基本述語: do 動詞・be □□	主語の後ろで「判断・気持ち」を言うとき、動詞以外の言葉も使う。また、その対象(O)を言うには前置詞句を使う。述語の先頭は事実助動詞: do, be and have で始まり、時制を表す。文の操作(肯定文・否定文・疑問文とその応答)は、助動詞の移動(倒置)で行う。
	UNIT-2	主語:名詞・代名詞	主語(S)には、人/物/事柄を表す名詞や人称代名詞(主格・所有格・目的格)が使われる。数えられる名詞には単数形と複数形があり、数えられない名詞は単数形である。
	UNIT-3	be動詞の使い方	「気持ち判断」の部分で動詞以外の言葉を使うときは『be 助動詞』を前に付ける。be助動詞は、主語によって語形が不規則に変化する: be(is, am, are, was, were, been, being)
	UNIT-4	一般動詞①	動詞の使い方①: 日常的な動作: 動詞は隠れた [do]助動詞を伴って使われる。文の操作ときに現れてくる。動きの対象や様子、場所などを表す言葉は、動詞の後ろで使われる。
2日目午前	UNIT-5	前置詞[句]	英語は前置詞とその後ろの名詞(前置詞句)が重要な意味を表している。個々の前置詞のコアな意味を覚えよう。場所や時の聞き方と表し方: where(どこで)や when(いつ)を使った疑問文には、前置詞句が答えとして使われる。
	UNIT-6	程度・頻度の副詞	「気持ちや判断に、意味を加える言葉(副詞)」は位置が決まっており「中位の言葉[mid]」と呼ぶ。いろいろな種類の言葉をこの場所で使い、発話を豊かにしている。
	UNIT-7	一般動詞② 自動詞	go, come, get, make, turn, stand, fall, remain などの基本動詞は、動詞の後ろの言葉が意味の中心で、話し手の気持ちの動きや様子を加える補助的言葉なので有効に使おう。
2日目午後	UNIT-8	名詞を説明する: 形容詞[句]	名詞の修飾語(形容詞)、名詞の前で使う前置修飾語(限定修飾)と、後ろで使う後置修飾語(叙述修飾)の2種類ある。後ろにある後置修飾語は、ネクサス(Nexus)になっている。
	UNIT-9	新しい情報を伝える	There is/are ..., This is/These are ..., It is □□ : 形式的な主語。there は初めての話題、this は、初めての知識を相手に教えるときに使う。It は、話し手と聞き手に、分かりきっている事柄の主語として使う。「天候・明暗・気温・距離・状況・時間」などは It を主語にする。
	UNIT-10	比較表現	物の様子(形容詞)や動きの様子(副詞)には、その程度を比べる言い方がある。これを形容詞・副詞の比較変化: 原級・比較級・最上級という。一定の規則があるものと不規則な変化になる語とがある。
	UNIT-11	助動詞②	助動詞は述語の先頭: 話し手の気分(その判断が起きうる確率の高さ): will=確実に起きる。can=十中八九起きる。may=半々くらいで起きる、must/shall=絶対に起きて欲しい。
	UNIT-12	助動詞相当語	will, can, may, must, shall の言い換え表現: be going to do, be able to do, have to do, be allowed to do: これらは「助動詞相当語」と呼ばれているが、事実助動詞(do, be, have)が使われているので、気分助動詞の述語とは「発話者の意図が違う」
3日目午前	UNIT-13	進行形: be doing ...	「~している最中である」という「そのときやっている行為」を表すには doing 形を使う。be + doing の形を「進行形」と呼んでいる。文中での位置によって働き、訳し方が違ってくるが、doing 形の「~している最中である」という基本の意味は同じである。
	UNIT-14	to-不定詞① : be to do	to do(to-不定詞)は「これから[必ず]する[ことになっている]」という意味。文中の何処でも使う。位置によって働きが変わるので日本語の意味・訳語が変わるの。
	UNIT-15	to-不定詞② 動詞+to do	to-不定詞の使い方(主語・述語・修飾語): 文中での位置による働きの違い。S: 主語、V: 述語、P: 叙述語(説明語)の「何処で使っても『~へ[必ず]行き着く』という意味は同じ」。
3日目午後	UNIT-16	動詞+to do と 動詞+doing の違い	to do(to-不定詞)は、「これから[必ず]する[ことになっている]」という意味で、doing はある動作・状態を「~している最中である」という意味で、使う位置によって変わらない。
	UNIT-17	be動詞の使い方②	「動きを表す」には、up, out, off, away, ahead, behind などの「動き副詞」を使う。基本動詞(have, get, make, run, give, take, put, set など)と組み合わせて述語を作る。
	UNIT-18	一般動詞②他動詞	動詞の使い方②: 抽象的な変化を表す: 意味の中心は後ろの言葉: 熟語(イディオム)・会話の慣用表現ではない。
	UNIT-19	疑問詞	文の要素を聞く5W1H(where, when, who, what, why, how)の使い方と答え方
	UNIT-20	従属接続節	文と文を繋ぐ接続詞: that, if, when, though, since, until etc. 理由や条件を表す文を繋ぐ場合、両方の文にSVOが要る。主文と補文の主語(S)が同じ時は、補文のS-v1 が省略される。

※ 受講までに「世界で一つだけの英語教科書」をご一読頂いておくとう理解が深まります。特に、第6章が「敬語」の理解に重要です。